

「聞法の角度」

さだかね

貞包哲朗住職(元九州龍谷短大講師)の「仏智に転じられて」(法藏館)という本に、こんなお話が紹介されていました。

あるお寺に、共に九〇歳を越えた二人のお念仏者がおられるそうです。どちらも、壮年時代は、壮健で大変な働き者でした。

ところが、一方の方は車いすの生活をされるようになり、介護施設に通っておられます。お見舞いにいくと必ず不安そうな顔で、

「こんな情けない身体になってしもうて……。もう私は死んだも同然でござんす……。早く、お迎えがこないもんかいな……」

と会うたびに涙を流し、愚痴をこぼされます。

もう一方の方も同じように歳をとられ、一人暮らしの生活をされています。特に数年前にお連れ合いを亡くされ、全く気力を無くし、睡眠薬を常用する生活でしたが、聞法を続けるうちに、ある時から立ち直りが見え始め、今やはり不自由な身の上ながらも、

「御院さん、おかげさまで、こんな思いもかけない歳まで生かして頂いております。お説教では、「一日一日を喜んで」と教えて頂きましたが、今の私には一時ひとときを有難うございますと過ごしております」

と柔らかい笑顔で申されるそうです。

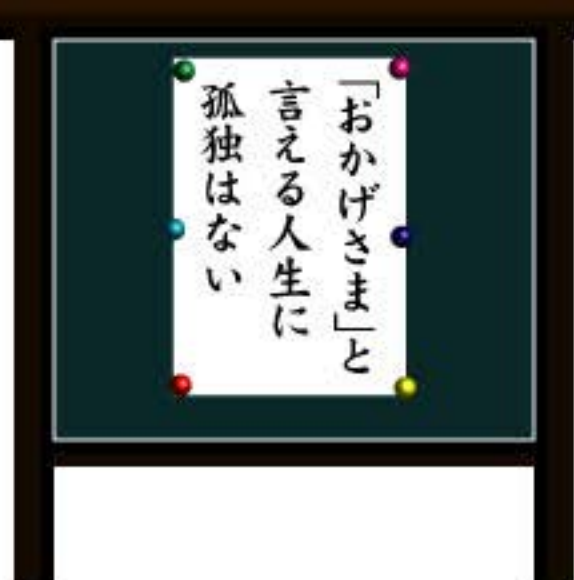
二人とも朝夕お内仏にお参りされ、寺の法座によく聴聞されていた「お同行」です。ところが一人は過去にしがみつき今を悩み、一人は不自由なままに今を喜ぶ何かを身につけておられます。何が違うのでしょうか。

私は、聞法の^{のり}角度が違うのではないかと思います。どのような角度で、私たちは、おみ法(み教え)を聞いているのでしょうか。

かつて、「おかげさま」という言葉は神道と仏教ではどちらが先かで論争したことがあったそうです。どちらの学者も古い文献を並べてお互いに譲らなかったそうですが、金子大栄(一八八―一九七六)師は、「神道が先だと言われるなら、認めていきましょうよ。仏教の思想をあらわす言葉をちゃんと神道が教えて下さったおかげでありありがとうございます、とこう言えるのが、おかげさまという言葉を使っている証拠なのでありまして、どっちも譲ろうとせず、おかげさまはこっちが先でないとか権威がないとするならば、このおかげさま論争ほど、人間の浅はかさをむき出しにしたものはありません」と言われました。

たとえ教えを聞いていても、自分を飾り、立派に見せ、武装し、そして相手を批判し、見下し、裁こうとしているならば、それは教えによって自分が知らされ育てられる姿ではなく、自分を正当化するために教えを道具や手段に利用しているのでしょう。

「おかげさま」「もったいない」「ありがたい」という言葉を聞いていながら知識だけになっていないか、こうしてこれを書いている私にも問われています。



～目覚め(信心)の教え・仏教～

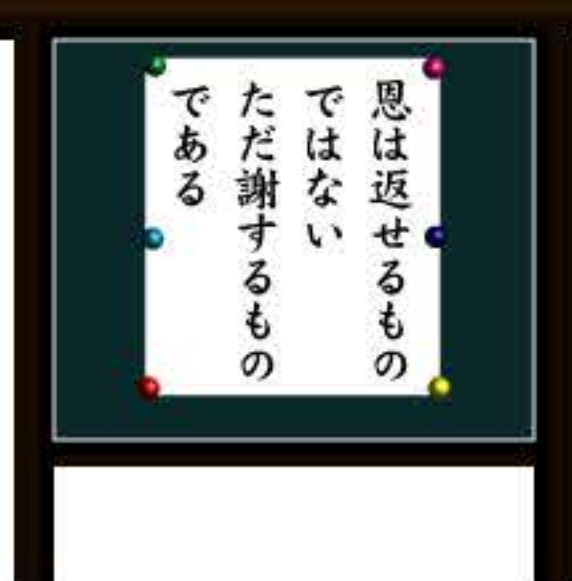
浄土真宗で一番大切な法要を報恩講といいます。武蔵野大学の『礼讃抄』に解説があります。

「この日(一二七二年十一月二十八日)は、人間として真実の生き方を真剣に考えられ、私たちにその道を示された親鸞聖人のお亡くなりになられた日であります」

この日を縁にして仏法に出遇う行事が

報恩講です(法事も亡き人を縁に法を聞かせて頂く行事ですから、親鸞さまのご命日法要ということです)。この恩という言葉は仏教独自のもので西欧にはない思想です。それで、恩という言葉は一言で英語などに翻訳できないそうです。勿論、仏教が伝わる以前の中国や日本にもなかったのです。

恩はインド古語サンスクリット語でkṛta-jña等といいます。クリタは、為されたこと、ジュニャは、知ること、つまり原因を知る心ということから因に心と書く恩(因+心)という漢字に翻訳されました。



価値として知る → 意味に気づく

私たちには、「価値を知る」(客観的)と「意味に気づく」(主体的)という、ふた通りのモノの見方が常にあります。例えば、「飯を食う」と「ご飯を頂く」という言葉を考えると分かります。茶碗一杯のご飯は百円前後の価値でしょう。しかし、そのご飯に、かけがえのないお米のいのちの意味を発見したからこそ、頂くという礼法を元にした言葉が仏教では使われます。しかしながら私たちは物事を自分の都合でしか見られないので、気付かないこと、見えないことが沢山あります。

私のいのちを支え、成り立たせてくれているけれど目に見えない無量無数(サンスクリット語でアミタ)の恩を尊いこと、有り難いことと実感として受けとめた言葉が、お陰様です。「お元気ですか? お陰様で」と挨拶になっていますが、何のお陰でしょう? 実は、陰なるものには、主語が決められません。あなたの、みんなの、先人・故人の、食べものの、思想・文化のお陰などと切りがありません。

気付かないけれど、多くのお陰(恩恵)を頂いていることを知る生き方を恵まれると、目に見えるものだけ、手に触れるものだけ、つまり数に表され、多いことや高いことだけを価値あることだとして、自分の都合のよいことだけを追いかける生き方、又は金や健康・若さだけを追い求める生き方とは一味違った深い生き方を恵まれるようです。病も老いも障害も、そして価値がないとされる立場の人にも意味が見えてくると、私の人生に無駄なもの、つまらないものは一つもなくなります。

殺生の罪 しがらきたかまる 信楽峻磨『真宗入門 ここに生命のふる里がある』百華苑刊四四頁

龍谷大学元学長、信楽峻磨先生の体験されたお話を紹介します。先生が仏教婦人会の集いに招かれ、あるお寺で法話をされた時のことです。一人の若い女性が、意見を言いました。

「私は時々、お寺でお説教を聴聞します。先日、ある御講師が、殺生の罪について話をしました。魚を食べ、肉を食べ、卵を食べることは、生き物のいのちを殺す大変恐ろしいことで、地獄にも堕ちる罪深い行いだと言いましたが、今の時代にそんなことを言っても通用しません。そんなことを言うから若い人がお寺に来ないのです。こんな古くさい話はやめるべきです。あなたも学者なら少し考えてください」先生は、色々考えることもあったけれど、先ず会場に向かって、

「今のご発言を聞きながら、お集まりの皆さんはどう考えていますか」と尋ねると賢ひんのほつれに白いものが交じる位の年齢の女性が、

「私は殺生の罪の恐ろしさ、重さを語って頂くことは、とても大切なことだと思います。お寺以外では、こんな話は聞けませんから、これからも、この事についてしっかりと教えて頂きたいと思います」と、きっちり言いました。すると先の女性が、

「ちょっと! そう言うけれど、あなたの家では魚や肉や卵は食べないのか?」と問い詰めました。すると大変悲しそうな顔をして、

「いいえ、私の家庭でも毎日、魚や卵を頂いています。でも、それは大変恐ろしい罪作りのことで、悪いことだと思います」

「食べていながら、それが恐ろしい罪を作り、悪いことだと思うのはおかしい。食べているなら、そんなことは思わないことだ」

「いいえ、魚だって牛だって、人に食べられるために卵や子を産む訳ではないでしょう。食べずにはおれないから食べておりますが、やはり恐ろしい殺生を犯しているのです」二人は平行線のまま、しばらくやり取りがありましたが、「食べていながら、そんなことを思っていたら、肉の味が落ちるだけよ」と、先の女性が捨てぜりふを言うと会場にはドッと笑いが起きました。しかし、先生は、

「今日は、とても有り難い仏縁を頂いた、尊い仏のお話を聞かせて頂いた」と思われたそうです。

念仏の信心とは、気づき体験

つまり、一人の女性には、よく見えていることが、もう一人の女性には全く見えていない、気づいていないのです。魚や卵のいのちの尊さ、そのいのちのかけがえのなさ、そうしたいのちを貪り殺し生きている人間の業、そして生きることの陰の罪の深さ・暗さが、一人にはよくよく見えているけれども、もう一人には全く見えていないということです。業とは、自覚・無自覚の内に行う私の行為です。

「肉の味が落ちるだけ」と捨てぜりふを言った方も母親でした。先生は、ふと「台所で食事の用意をされるのだろうが、この母の周りに漂う雰囲気、その母に育てられる子どもの心。一方で、目に見えぬ所で殺生を犯している私たちの暮らしの陰の暗さ、罪深さに気づかされ、頭が下がっている母と、その母に育てられる子どもの心。どこかで、違いが出て来るのではないか」と想像されたそうです。

仏教の教え、親鸞さまの教えは、目に見えない仏様やまったく分からない「あの世」のことを多分そうだろうと思いこんだり、そんな話をアテや頼りにすることでは、さらさらありません。分からないことを信じ込むのは仏教の本質ではありません。

教えを聴聞し、念仏を称えそれを身につけていくことによって、今まで日常生活では見えなかったこと、気付かなかったことが、だんだんと見え、知れてきて、新しい心の眼が見開かれていく体験が生まれます。親鸞さまは念仏による信心とは、気づき、目覚めの体験と教えています。

するとそこに今日までの自分がどのように生きて来たのか、そして今いかに生きているのかということに、心をひそめ、思いを凝らし、深く深く顧みていくことができます。

しかし、自分で自分のすべてを顧みることはできません。ちょうど、鏡の前に立てば自分の姿が全てが見えてくるように、教えを聴聞し、教えの鏡に映し出される所にありのままの自分が見えます。教えの鏡に照らされて知る自分は、たとえどんな人であろうと美しく、立派なものではありません。罪を犯し、多くの恩恵を頂いていることを忘れた、醜い思い上がった自分です。

先の女性が、「魚を食べ、卵を食べることは罪の深いことです」と言った言葉は、単なる客観的な知識ではありません。念仏という教えの鏡を通して自分の姿に気づかされ、そして多くの恩恵を頂いて生かされている自分の姿を深く思い知った人の実感、つまり信心の言葉です。

報恩感謝ということ

仏教や親鸞さまの教えは念仏を称えつつ、その念仏を如来様の気づけよ、目覚めよ身の程知れよという喚び声として聞く仏教です。日頃は自分中心に生きている自分を学び、厳しく顧み、自分に気付かされていく道です。そうして自分の姿に慚愧を持って目覚めていくなれば(ナムと頭の下がる智慧を恵まれたならば)、それと全く一緒になって、今まで見えなかったけれども、私を支え包んでいてくれるこの世の事実、大きな恵みに目が開き、それをお陰様、有り難いことだったと感謝する心が自然と育まれていきます。これが、報恩感謝といわれる生き方です。感謝とは、謝ることを実感すると書きます。謝らなければならぬほどの自分が知らされた時、感謝というのでしょうか。